

## 「遊びながら…」と「餓死の決心」

― 内村鑑三の福音信仰 ―

晩年の内村鑑三が、ある年の正月、弟子の一人に向って「遊びながらやろうや」と言ったという、先号の額賀さんの一文を拝見し、内村に関するもう一つの話の話を思い出した。

それは先年亡くなれた比屋根安定氏が、「内村鑑三著作集」の月報（第十五号、昭和二十九年六月、「獅子吼する預言者」）に書いておられるもので、同氏の義弟にあたる人が神学校を卒えて伝道に立つに際し、内村は「餓死の決心」と大書して与えたという。これはいつごろのことか詳らかにしないが、昭和三年七月二十日付の書信（牧野実枝治あて、永眠の二年前）にも「伝道師に餓死の決心は付き物であります」とあるから、これも晩年の内村の言葉といってよいであろう。（なお、このときの揮毫ではないようだが、「餓死の決心」という筆蹟が、長谷川周治編「内村鑑三先生御遺墨帖」に収録されている。）

「遊びながらやろうや」の「やろう」は、言うまでもなく伝道のことであるから、「遊びながら」と「餓死の決心」とは、いずれも内村の伝道に対する態度を示すものである。内村が矛盾の人であるとはしばしば言われることだが、これもまたはなはだしい矛盾であると言わねばならない。しかし私には、この二つの言葉は実によく内村その人を表わしているように思われる。それは、一が晩年の内村がついに到りえた境地の表白であるにとどまらず、他がこれまた晩年に、若い伝道者に自分の経

験（内村は生涯に三度餓死の決心をしたという。「独立五十年」参照）を語って訓戒を与えたものというにとどまらず、ふたつながら実によく内村の福音信仰の本質を示していると思うのである。

ところで、額賀さんにこの話をしたY氏は更に、この内村の言葉は「塚本（虎二）さんなら分るが、矢内原（忠雄）さんでは怒るだろう」とつけ加えたという。そして塚本、矢内原両氏を知る額賀さんは、Y氏の言うところは「何か当たっていると思う」と言われるのだが、塚本氏も矢内原氏も全く知らない私には、このY氏の言葉は単なる人物評ではなく、宗教の根本問題に対する深い洞察であるように思われる。

内村鑑三の弟子と言われる人たちの中に、信仰的に全くあい反する二つのタイプがあつて、塚本氏と矢内原氏がそれぞれ一方を代表する人物とみなされていることは、こんにち周知のことと言つてよいであろう。

一つは、内村のなかにある預言者的な一面——激しい信仰、厳格な道徳、深刻な文明批評、強烈な反抗精神——こそ内村の真面目であるとして、そういう内村の忠実な弟子たろうとする。かれらは誠実で良心的であり、積極的に歴史の創造に関わり、と努める。権威と体制を批判し、社会改革の熱意に燃える。非戦論、平和主義など、いずれもこの人たちの主唱するところである。

他は、内村の信仰を要約して「信仰のみの信仰」とし、「人が救われるには信仰さえあればよい、たとえ教会に属さずとも信仰さえあれば救われる（教会の外に救いあり）」と主張する。

そしてこれこそ無教会主義、いな無教会主義の徹底であると言  
うのである。かれらは第一の立場を批判して、信者は「信仰の  
み」に立って、一切のこの世のことに煩わされるべきでない  
し、聖書の研究に傾注する。

以上の二つの傾向は、「宗教」が本来的にもっているもので  
あって、内村鑑三のような偉人（偉人とは矛盾の人である。）  
の中に、その弟子たちが、全く異なった二つの面を同時に見出  
したからとて何の不思議もない。むしろ彼の偉大さ（弟子は師  
にまさらず。）と、無教会グループの活力（恐らくこう言っ  
てまちがいないだろう。教会内に、これだけの宗教の根本に関わ  
る問題があるとは、ついぞ聞いたことがない。）とを証するの  
みと言うべきであろう。

しかし、そのいずれも内村鑑三のすべてではない、というこ  
とは明らかである。彼は、第一のグループの人たちが英雄視す  
る良心的非戦論者として止まるべく余りにも福音的であり、つ  
いに再臨信仰に基づく聖書的平和主義に生きるに至った。彼は  
第二のグループの人たちの主張にもかかわらず、「私は『今日  
流行の無教会主義者』にあらず」と遺言して、自分の信仰を守  
り通した。

内村鑑三は「十字架にすぎる幼児」であって、預言者でなか  
った。彼には確かに、稀にみる厳しく、また激しいものがあつ  
たが、それは決してそれじしんで偉大なものではなく、たまた  
ま道徳の問題として、あるいは社会（文明）批評の問題として  
あらわれたにすぎなかった。彼は決してこの世も教化・改革し  
て、神の国を招来しようとはしなかった。彼は静かに主により

たのんで、神の国の成るのを待ち望んだ。彼はカイザルのもの  
はカイザルに、そして神のものは神に献げた人であった。

この点、内村は徹底した福音信仰者であった。「さ、今年も  
一つ遊びながらやろうや」という彼の言葉は、「真面目すぎる」  
人にとつては、あるいは「真赤になつて怒る」べき、ふまじめ  
な言葉と聞こえるかもしれない。しかし、これは彼の十字架信  
仰の告白なのである。「自分の救は、すでに主の十字架におい  
て完成してしまっている。今年も、すべてを彼にゆだね、安心  
して、楽しくやろう。今年も、キリストの苦しみのなみのお足りな  
いところを、自分の肉体をもって少しく補うことのできること  
を感謝して働こう」というのが、この言葉の真意であろう。そ  
うでなければ、内村のあのすばらしい伝道など、できるはずの  
ものではない。

その同じ内村が、「餓死の決心」をもって伝道の心構えとし  
たことも、また彼の面目躍如たるものがある。ふつうの宗教家  
なら、「神は必ずその僕の必要を備え給う」と言つて、伝道の  
壮闘を祝するかもしれない。そして、そうした人からみれば、  
「餓死の決心」はいかにも不徹底・不信仰と映るかもしれない。  
現に比屋根氏は、「伝道する者が餓死しては、神さまも何もあ  
つたものじゃない。エリヤは荒野の岩窟に籠もつても、鳥が養  
つたではないか。『わたしなら、一汁一菜之決心と書くのだが  
ね』と、わたしは苦笑いした」と言つておられる。

しかし、この言葉は内村の信仰が徹底した福音信仰でありな  
がら、決して「信仰のみの信仰」のもつ、あの「信仰の自己陶  
酔」に陥ることがなかったことを示している。信仰にとつて、

それが深くなればなるほど、何が恐しいといつて、神の愛と人の信仰を強調する余り、神に狎れしたしみ、「神と共にわれら楽しく飲食せん」とすること、神の愛をもてあそんで、これに甘え、「恵みが増し加わるために、罪にとどまるべし」と居直ることにまさるものはない。それは聖なるものを聖としない不敬虔であり、恐るべきものを恐れない不信仰である。内村の信仰は、この点実に健全で、神に親しみ、神を試みてはばからないギリシヤ主義的宗教性や、大悟徹底をよそおう大乘的ヒロイズムなどは、およそ無縁であった。

それでは、いったい内村のこの福音信仰の秘密はなにか。彼が徹底的な「信仰のみ」の信仰に生きながら、あくまでも敬虔で道徳的、良心的、常識的でありえたのはなぜか。それは彼の福音信仰、すなわち深刻無比な罪の意識と、絶対帰依のキリスト信仰そのものが、その秘密であるというほかはない。晩年のある日、彼はもうひとりの若い弟子に次のように教えたという。信仰には多くの祝福が伴なう。しかしその恩恵に狎れすぎ、恩恵の根本であるキリストの信仰を忘れ去る危険がある。

：：神の栄光が第一である。キリストによる我が救いが示されたのは、神様が我を特別に愛し給うたからではない。神の栄光が現われるための、彼のみわざの一部なのである。神は神御自身のために我を救い給うた、と言うのである。

真面目すぎる結果、福音を失ってはならぬが、その反対に恩恵になれすぎて、慎しみを失なってはならぬ。恥を知ることがなければ、福音主義に立つプロテスタンティズムは恐ろ

しい結果に導くのである。：：：：：：：

（石原兵永「身近に接した内村鑑三」（中）二三五ページ、山本書店、一九七二）

人は自分の主義・主張を自分の信仰と錯覚して、律法主義に陥る。そして自分の信仰・思想によって救われると幻想して、信仰主義に墮する。この二者は「宗教」の両極端であり、「宗教」固有の二大誘惑である。人をしてそのいずれにも墮さしめず、聖にして義なる神を畏れつつ、しかもなお、はばかることなく恵みの御座に近づかしめるものは、「宗教」ならざるイエス・キリストの宗教、イエス・キリストの十字架による罪のゆるしの福音以外にない。これこそは「すべて信じる者に、救を得させる神の力」であり、「十字架にすぎる幼児」に賜う神の恵みである。

かくして「遊びながら」と「餓死の決心」とは、ただに内村鑑三個人のことではない。実は、福音の根本に関わる重大問題である。私共ひとりひとりの生死に関わる重大事を語っているのである。

（所載）「しもべ ドウーロス」54号 一九七二年四月